



Kobe University Repository : Kernel

Title	「マー、モッテコイ。マー、シックシック。」：『横浜方言演習』の版をめぐる
Author(s)	田中, 雅男
Citation	近代,57:117-134
Issue date	1981-12
Resource Type	Departmental Bulletin Paper / 紀要論文
Resource Version	publisher
DOI	
URL	http://www.lib.kobe-u.ac.jp/handle_kernel/81001632

Create Date: 2017-08-23



「マー、モツテコイ。マー、シツクシツク。」

——『横浜方言演習』の版をめぐる——

田 中 雅 男

一本誌第五十五号（一九八〇年二月発行）に「『ザ・ジャパン・パンチ』とハムレットの独白」と題する小論を寄せた。一八七四年第一号の『パンチ』紙に掲載されたハムレットの独白の珍訳「アリマス、アリマセン、アレハナンデスカ……」は、当時流布していた安直な日英会話書を揶揄したパロディであるという主旨のものであった。しかしその中でパロディの主要な対象として扱った『横浜方言演習』の初版が刊行された時期を推定で論じていたところから、それと珍訳との関係については十分な説得力に欠ける。うらみがあった。ところがその後、珍訳の一月余り前に『演習』初版の書評が英字新聞に掲載されていたことを、升本匡彦氏よりご教示頂き、そのコピーを頂くことができた。また重久篤太郎氏よりは小論の不明なる所について二、三ご教示頂いた。ここに紙面を拝借して『横浜方言演習』について再考を試み、論を補強し、よって両氏に謝意を表すことにしたい。なお、先の小論を纏めるにあたり利用した『改訂増補版横浜方言演習』は半沢正時氏のご好意により入手したタトル社復刻版（一九五三）のコピーによるものである。遅ればせながら、あわせてここに謝意を表す。

1

一八七三年一月二十二日付の『ザ・ジャパン・ウィクリー・メール』に、『横浜方言演習』(Exercises in the Yokohama Dialect, 1873) について、「その方法の新奇にして巧妙なること、一般向きする見事なまでに簡潔なるこ

との故に、大なる関心を集めてゐるとして、かなり長文の批評が掲載されている。これがウエンクステルン (Fr. von Wenckstern) の『大日本書紀』(Bibliography of the Japanese Empire) 第二卷(一九〇七)、六四頁に掲載されている次の書と同じものであることは間違いない。

Atkinson, H. Exercises in the Yokohama dialect, 8vo., Yokohama, about 1870. For second edition see under "Homoko" on page 76.

A humorous little grammar of "Pidgin-Japanese." The author was an old resident in Japan. [Quoted from "Chamberlain, Things Japanese," fourth edition, p. 366.]

しかし、この記録には一つ問題がある。書評には、書名に著者名が冠せられていないばかりでなく、文中にも著者名を明記した個所はないのである。「無名の著者」("the unknown author")? 『演習』の著者("the author of the 'Exercises'")とあるのみである。初版はどうやら著者名を伏せての出版であつたと思われる。

それではその小冊子の著者を特定したのは誰か。チェインバレン (Basil H. Chamberlain) である。ウエンクステルン自身断つてゐるように、右の記録は彼の『日本事物誌』第四版(一九〇二)からの引用である。手元にある第五版(一九〇五)の復刻版(タトル社発行)によると該当個所は次のとおりである。

Pidgin-Japanese ... A Yokohama resident of old days, Mr. Hoffmann Atkinson, made up a most entertaining little book on this subject, entitling it *Exercises in the Yokohama Dialect*. ... (p. 369)

彼は「事物誌」の初版（一八九〇）の原稿を執筆した時には、「演習」の初版を手に行うことができなかった。初版ではその個所は次のようになっている。

Pidgin-Japanese ...An old Yokohama resident, who modestly hid his name under the alias of "The Bishop of Homoco," made up a most entertaining little book on this subject a few years ago, entitling it "Exercises in the Yokohama Dialect." ... (p. 270)

「数年前」に書かれた小冊子とあるから、そのとき手にしていたのは一八七九年刊行の『改訂増補版』であったと思われる。それに添えられた序文から、その冊子が初版でないことを知っていた彼は、初版を探したに違いない。そして漸く第四版のための改訂作業前に『演習』初版を手に入れることができたのである。しかし彼がどのようにして著者を探り当てたのかは明らかではない。あるいは著者自身から進呈されたのかも知れない。重久氏によれば、ホフマン・アトキンソンという名は、七十二番館、スミス・ベーカー商会 (Smith Baker & Co.) の商館員の一人として『横浜人名録』 (*Yokohama Directory*) 一八六九年版、一八七〇年版に出ている由である。

この初版は『ジャパン・メール』の書評子によれば、「編集上の見落ししか、あるいは偶然によってか、印刷上の不統一が目立ち、明確さに欠けるうらみ」があると言う。この冊子の横浜方言の表記は類似の音価を持つ英語の単語に置きかえるという独特のものであった。「cheese eye」(ちいぎん)、「it suits」(いっすい)、「Ohio」(おはよう)と綴る類である。彼は当然その表記法に興味を引かれた。そして中にはその原則がくずれているところがあると見て、「piggy nai」(= not to remove) という例をあげている。「nai」というのはよろしくない。将来版を重ねる時

には“right”と改めよ」と注文をつけている。そのような不統一があつてのことか、その後初版の形のまま増版されることはなかった。ついにながら『改訂増補版』では、その個所は“piggy right” (p. 18) と訂正されている。

2

『演習』の第二版の存在は謎に包まれている。一八七九年版の『改訂増補版横浜方言演習』は従来から第三版とされている。それには第二版、第三版のための献辞、序文、新聞評が添えられている上に、ウエンクステルンの書誌に掲載されている第二版とは書名が違ふからである。しかし、言われているような第二版なるものがはたして実在したのであろうか。

タトル社の複製版によれば『改訂増補版』は、内表紙、献辞、序文、新聞評合せて十三頁、本文十四頁、「南京(中国)化日本」“Nankinized Nippon”と題する珍妙な追補三頁、都合三十頁から成る小冊子である。表紙は次のとおりである。

REVISED AND ENLARGED EDITION / OF / EXERCISES / IN THE / YOKOHAMA DIALECT.
// TWENTY SECOND THOUSANDTH // Revised and corrected at the special request of the author / by
the BISHOP OF HOMOCO // YOKOHAMA, 1879.

冒頭に添えられた献辞によると、第二版は言語学者マックス・シュラー教授と横浜方言の著名な教師ジョン・グリゴール氏 (John Grigor, Esq.) に、第三版は両氏に加えて、「香港ヴィクトリア市法務長官」N G チョイ氏 (Mr.

Ng Choy)に献げられている。グリゴリー、NGチヨイなる人物が実在したかは不明である。しかし余りにも著名なマックス・ミュラーと並置するに足る人物でないことは確かで、この小冊子が尋常なものでないことを読者に予知させるに充分な役割をはたしている。

献辞の後に、第二版の序文と新聞評、そして第三版の序文と新聞評が続く。『ジャパン・メール』の書評に当時語学教授法として広く採用されていたオレンドルフ・システム(Ollendorf system)に準拠して、この小冊子が構成されている旨の紹介があるところから、初版にも序文が添えられていたはずである。ところがこの版からは削除されてしまっている。いやさうではない。巧みに衣替えされて第二版の序文として掲載されたのである。

第二版の序文はいかにも不自然な文章である。初版を改訂したのが原著者でないことはわかるけれども、そこからは改訂を思い立った心のはずみが伝わってこない。しかも第三版の序文には付いているのに、ここには署名がない。とにかく全文を引用しよう。最初は「」の語句を無視して読んでいただきたい。

The author of the first [this] Edition was guided in his task by a conscientious adherence to the most reliable authorities accessible. Even, however, with these aids, the compilation of this small work was then attended with difficulty, owing in great part to the continual changes as the dialect crystallizes, so to speak, and as progress is made toward fixing this valued means of communication between the native and foreign resident or visitor.

The method is based, as will be perceived, upon the Ollendorf system, the advantages of which are patent in any continental city visited by English or Americans.

Neither the author nor the reviser flatter themselves [The author does not flatter himself] that they have [he has] made any great addition to philological literature; but if they have [he has] succeeded in doing no more harm to learners of Japanese than their honored predecessors and successors in similar labors, their [his] highest aims will have been attained.

It is not claimed that the present small book contains all the words used, but none are given which are not used as described. It is easy to see the advantage of getting at the dialect actually used in Yokohama rather than learning by laborious study the Samurai dialect (the one generally taught by professors and books) and which nobody understands beyond a few teachers.

いま読んでいただいたのが第二版の序文である。それでは今度は下線部を「」の語句に置き替えて読み直していただく。それぞまなしく初版の序文となるはずである。初版が著者名を伏せて出版されたことは先に述べたところである。

第三版の序文は、それに引きかえ、冒頭から改訂者がこの冊子に寄せる共感が吐露されて、軽妙な筆の運びである。前半を引用しよう。

I have had great pleasure in revising this little work, which will doubtless be found well worth studying by all persons engaged in Commerce both in China and Japan, whether as Merchants, Shipowners, Brokers, Auctioneers, Consul-bobbery-shots¹⁾ (from whom may Heaven preserve us), owners of Racing Stables, Mis-

sionaries, "et hoc omnes ero"²⁾, I have not thought it necessary to enter into the more delicate grammatical intricacies indulged in by Hepburn, Satow,³⁾ Ishibashi and other modern compilers of Dictionaries of the Japanese Language as, during a somewhat extended residence in Japan, I have found the Grigorian dialect is more easily understood by all intelligent natives and more generally used by foreigners of all classes.

註

- (1) 横浜言葉、本文二五頁に集録されている語。“shots”は“shos”の誤植。「人」の複数形。“bobbery”は「騒動・騒音」の意。合せて全体で「弁護士」の意。
- (2) ラテン語と日本語の混交語句、「ソシテコレニ類スルモノ全テ、いろいろ」。“ero”はラテン語“esse”の一人称未来形“i shall be”に模した形。
- (3) J・C・ハバーン(ハボン)のこと、『和英語林集成』(A Japanese and English Dictionary, 1867)の編者。
- (4) E・M・サターと石橋政方のこと。両名はAn English-Japanese Dictionary of the Spoken Language, (1st ed. 1875, 2nd ed. 1879)の編者。
- (5) ジョン・グリゴリー教えるところの横浜方言。

それに続く後半はNGチャイ氏の求めに応じて本文の後に『中国化日本』と題する三頁を追補するに至った次第が滑稽に語られる。そして最後は“HOMOCO”という署名と

Given at our Place.

The 31st day of March, 1879.

the 13th year of Meiji,

Second Cousin of Jimmy Tenno.

という勿体振った書き方の日付で締め括られている。第二版の借り物の序文に比べて、第三版のそれは、正真正銘改訂者の言葉で語られていて、それまでに改訂版なるものはなかったという印象を与えるに充分である。

第二版、第三版の序文の後にそれぞれ新聞評が宣伝として集められている。第二版に添えられたものは当然初版を
見ての新聞評の集録のほずであるが、例の『ジャパン・メール』の評は掲載されていない。また第三版に添えられたものにも、初版と第二版を比較した評は皆無である。第二版には虚実折りませて、いかにもありそうな邦字新聞紙名が並んでいるのに対し、第三版には一見嘘とわかるような新聞紙名が実在の新聞紙を霞ませる程多く並ぶ。“Chugai Bakka Shinbun” (中外馬鹿新聞)、“Naru Hodo Shinbun” (なるほど新聞)、“Jimicky-maru Shinbun” (人力丸新聞)、“Sarapan Kome-fune Shinbun” (米船難破新聞)等々。それとは反対に評の中味は、第二版では、「横浜言葉になじみ、英語が読める日本人にはこの上なく価値ある本」とか、「日本が列国に抜きん出る道は唯一つ、この本を学ぶべし」とか、はては「フンボルト『宇宙論』、バートンの『憂鬱の解剖』に匹敵する書」など歴然と嘘を並べ立てているのに対して、第三版では一見まともな評が続く。

第二版と第三版の新聞評に見られるそのような対照には、同じ時期に一気に一人の人間が書かなければ出てこないような作為が感じられる。序文と合わせ考えるとき、第二版なるものは存在しなかったと断ぜざるを得ない。存在するかに見せた改作者の冗談であり、評判の程を誇示する巧みな宣伝であったのである。そう言えば、表紙の版数を示す位置に記されている数字“Twenty Second Thousandth”の謎も解けるではないか。“Twenty thousandth”の中

に “Second (edition)” を埋め込んだのである。

3

一八七九年刊行の『改訂増補版』こそが『演習』の第二版だとするいま一つの根拠がある。ウエンクステルンの『大日本書史』の記録である。先に引用した “Atkinson” の項の中で言及されている “Homoko” の項がそれで、同書の七六頁に次のように記されている。

Homoko, Bishop of [a pseudonym]. Elementary Grammar of the Yokohama dialect, 17pp. and prefaces,

small 8vo, Yokohama, 1879.

This is the second edition of the book by **H. Atkinson** for which see page 74.

『横浜方言初等文法』なる冊子が実在したかは不明である。仮に実在したとしてもこの記述には誤りがある。この冊子の内容は「十七頁と複数の序文」から成っているといふのであるから、『改訂増補版』と同じ内容であったと考えられる。『改訂増補版』は初版の本文を改訂し十四頁に収め、その後新たに「中国化日本」と題する三頁を追補して十七頁としたことは先に述べたところである。『初等文法』にその増補部分が含まれているといふことは、その出版が『改訂増補版』より後であったということの意味する。つまり『改訂増補版』こそが第二版で『初等文法』が第三版ということになるわけである。

一步譲って「十七頁」の中に『改訂増補版』の増補分が含まれないか、あるいは頁数に誤りがあったとすればどう

だろう。『初等文法』は一八七九年の出版である。それが第二版であるためには『改訂増補版』より前に出版されていなければならない。ところが『改訂増補版』はその年「三月三十一日」に脱稿しているのである。改訂増補の予定を立てながら二三か月を惜しんで不備のまま第二版を刊行するとは考えられない。それが第二版であるためには「一八七九年」という発行年に誤りがあるとしなければならない。

どうやら、『横浜方言初等文法』というのは実在せず、『横浜方言演習』の誤りである可能性が強い。ウェンクステルンの書誌は必ずしも一次資料によって纏められたものではないことは先の「Atkinson」の項の記述で明らかである。この場合もその可能性が強いのである。

先に述べたように、チェインバレンが『日本事物誌』を執筆したとき、手にしていたのは『改訂増補版』であった。ウェンクステルンは同じ書誌の中に『日本事物誌』を初版から五版まで集録している。とりわけ初版の項では協力者の名まであげ記述が正確であるから、それを直接手にしていたと思われる。そしてその中の「ピジン日本語」(Pidgin-Japanese)の項に「本牧僧正」(The Bishop of Homoco)による『横浜方言演習』という書名があげられていることを知っていたはずである。そうでなければ書誌に「Atkinson」の項を記すに際して、『事物誌』を引用するとき、わざわざ第四版と断ることはしなかったはずである。「本牧僧正」が「アトキンソン」に改められたのは第四版からであったのは既に述べたところである。

ウェンクステルンは「本牧僧正」と「アトキンソン」が別人であることを知っていた。書誌の索引で、彼は「本牧僧正」とは「競売人コープ(Cope)の筆名」であると指摘している。そうすれば『事物誌』の初版と第四版に出ている『横浜方言演習』が同じ書名であっても別人の書いたものであることを知っていたことになる。にもかかわらず、彼は書誌に本牧僧正の『横浜方言演習』を記さず、同人の『横浜方言初等文法』なるものを第二版として記している

のである。記入の際に書名を誤ったとしか考えられない。つまりは『改訂増補版』こそがウェンクステルンの言う第二版に当たるわけである。

書誌の記述が一次資料によるものでなければ、本のサイズ「小型八折版」というのも信用できない。『改訂増補版』は復刻が原寸通りだとすれば小型四折版である。当時イギリスでは鉄道旅行などのつれづれに読まれる肩の凝らない軽い読み物が八折版で出回っていた。駅の売店で売られていたペントレー・レールウェー・ライブラリーなどという叢書があった。その中には『パンチ』誌の常連寄稿者パーシヴァル・リー (Percival Leigh) が匿名で書いた『滑稽ラテン語文法』(The Comic Latin Grammar)、『滑稽英文法』(The Comic English Grammar) という類のものがあった。そのような冊子からの連想があったのかも知れない。

ウェンクステルンのこの項に関する記述は、以上検討したように残念ながら不備である。ところが『初等文法』なるものの存在いかんにかかわらず、本牧僧正の『改訂増補版』がアトキンソンの『演習』第二版であることだけは証明してくれる結果となったのである。

なお、重久氏によれば「本牧僧正」の本名F・A・コープなる人物はアスピノール・コーンズ商会 (Aspinall & Cornes, Co.) の勤務を経て、後に五十一、五十二番館に独立して競売業、委託売買業を始め、明治初年まで『横浜人名録』に登録されている人物だということである。一八八四年六月号の『ザ・ジャパン・パンチ』に「本牧僧正の住居」(Residence of the Bishop of Homoco) という書き込みのある漫画が出ているが、彼と何らかの関りのあるものであろうか。

さて、「横浜方言演習」がどのような演習内容から成っていたかは、「改訂増補版」を通してこれまでいろいろ紹介されているので、ここで屋上屋を重ねるつもりはない。ただ折角『ジャパン・メール』の書評があるので、それを通して、この冊子がどのように歓迎されたかを紹介しておこう。

英米人向けの日本語会話書は既に数多く存在していた。一つの英文に対して敬体と常体の二種の日本語が当てられているものもある。この年また新しい入門書が刊行された。E・M・サトーの『会話篇』(Kunita Hen, *Twenty-five Exercises in the Yedo Colloquial, for the Use of Students*, 1873)である。正統な日本語会話書のどれを開いても英文に対して置きかえられた日本語がローマ字書きということもあるが長くなっている。しかもローマ字といっても、まだ記述の方法が細部まで統一されていなかった。初心者が速成でこなすには骨の折れるものばかりであった。そのような正統な会話書の向うを張って、現われたのが『演習』である。置き換えの際正しい文章法を無視して、単語を並置するだけという過度に単純化されたルールを押し出したのである。

書評子は当然ながらその新奇な方法に目を奪われた。その余りの簡潔さゆえに、範例を越えて、どれほど応用がきくのか疑問視はしているけれども、具体的な展開のうちにほとぼしり出る著者のユーモアに共感している。

「横浜方言音を英語の語音 (vowels) に置き換える」という彼の全く独創的な処置は、この書の巧みなる面を示す一例である。正統な理論に基づけば、この問題の場合は、イタリア語の母字を使用し、子字を使用する時は、それが表す音のうちもっとも代表的な音に限ってそれを用いるのが肝要であるということになっている。『演習』の筆者は大衆の感覚にまっとうから立ち向い、時として、いわば大衆の顔面に強烈なストレートを見舞わんがために、あえ

てその理論を踏み越える。彼は指し示す事物にもっとも相応しい綴字を用いている。いやそれどころか、綴字のよく知られている馴染みの単語を使うのが学習者の記憶の助けになると思えば、恐るることなく、非難をもともせず、それをやりとげるのである。この例は第一課の冒頭に出てくる。代名詞“your”を“oh my!”と訳しているのだ。子供のころから耳に馴染んでいる短い句を用いることによって、学習者の心に即座に当箇所を焼きつけてやろうという専らその観点から行われたことであってみれば納得がいく。これを厳密に正式の綴字法で“omaye”としていたら、記憶するのに半時間はかかる。それだけの時間をかければこの本のほぼ全巻を頭にたたき込めることは請合いである。」

書評子はその後、綴字法についていくつかの実例を示してから、その方法を支持するための興味深い逸話を披露する。

「伝え聞いた話なのだが、あるアメリカの紳士が腹立ちまぎれに横浜の下僕に向って、母国語で相手を罵るもともひどい言葉を浴びせようとした。記憶を呼び起こしてその言葉を口にしたのだ。ところが日本語によく似た言葉があるのに気付かずにその言葉を口にしたから大変だ。“oh you!”で始まるその言葉は命令だと感違いされて即座に「お湯」が持って来られた、それが更に火に油を注ぐ結果となったという次第である。もしそのアメリカ紳士が“oh you!”というのが——この著者はちゃんとそう綴ってくれている——「お湯」を意味するということを思い起こすか、そういう事実をしっかり心に銘記していたならば、このような家庭の破壊という悲惨極まる結末を回避できたであろう。罵りの言葉の前に付ける呼格の代名詞を排除し、罵りの言葉だけで満足していれば、お湯を持って来られることもなく、更なる怒りをかき立てずに済んだものを。治療代を仕払わされることもなく、法廷で不名誉な恥を晒さずに済んだというものである。」

更にこの『演習』の際立った特徴として、一つの単語に広い守備範囲を持たせていること、例

arimas (to have, will have, has had, can have; to obtain; to be; to wish to be; to be at home; to arrive; to want)

piggy (to remove; take away; carry off; clear the table; get out of the road)

しまりのないなまよした日本語からはおおよそ想像できない程、簡潔な言い回しがあること、例

Where are the small cabinets you showed my
friends from England last week?——*Cheese eye doko?*

Unfortunately they were purchased on Tuesday
by a party of tourists from San Francisco——*Arimasen.*

を指摘してから、次のように続ける。

「この冊子の最後に英訳のための横浜言葉の文が並んでいる。そのうちのあるものはコーリー・シバー流の改竄を経た、シェイクスピアからの引用、あるものは大詩人の原詩を再編したものである。一例を示しておこう。リチャードの絶叫が次のようにパラフレーズされている。

Ginrick-pshaw motty koy — ginrick-pshaw arimassen, nar motte koel!

人力 車 持って こい。 人力 車 ありません。馬持ってこい。

Mar sick sick, betto drunccky drunccky.

馬 シックシッタ別当トランキーダランキー。

Oh my piggy jigggy jig, watakshee pumguttz sinjo arimas.

お前ヘケ 直 ヲ々 私 ポンコツ進上あります。

これを敢えて優美な英語に翻訳し直せば次のようになるだろう。

“A chariot! My kingdom for a chariot! or, if the chariot be absent, a horse, according to standard editions.”

これに対して忠実な部下が答える。

“My king! his horse has fallen, bleeding from a hundred wounds. As to his faithful squire, after life’s fitful fever he sleeps well.”

これに対して王が——

“Haste, haste, ye all, or mine shall be the hand to deal forth vengeance!”

とわめきおろす。」

これはまさにこの冊子の本質を射抜いた指摘である。この冊子は才気あふれる冗談に満ちている。書評子はそこに共感を覚えたのであった。そう言えば本文中の註一つ見落とせない。

“Sheebatchey” (火鉢) is used as well as “Heebatchey”; the gender is not known.”

は “she” と “he” とを掛けた洒落だし、

“Todie-mar” (只今) is more correctly translated “eventually,” “when it answers my purpose.”

Grammatical students asserted that it means “never.”

は「只今」と言いながら、なかなか要件を果たさそうとしない日本人への痛烈な皮肉となっている。書評子が触れていない一面を合せて紹介しておく。

さて一応の勸所を紹介し終えた書評子はこの冊子に触発されてか、次のように冗談交りに文を締括っている。

「残念ながら紙面が尽きたが、最後に一言、この冊子から受けた印象を述べて締括りしよう。この冊子はまさに「祖国を捨て他国に住まう者は名においてその地の者となり得ても、言葉振舞まではかなわぬもの」とのエウリピデスの宣言を論破するように思える。彼がもしこの『演習』を見ていたら、決して早急にそのような断定を下さなかつたであろうと確信するものである。その著者が『エレクトテウス』を書いたとき、完全に言葉の交換ができないようなところでは、双方の考えが完全に融合、調和することは不可能であるし、そのような言葉の交換は人間技の及ぶところでないとの印象を抱いていたことは明らかである。しかしそれは二千年昔のこと、かかる方言を有する日本なる国の存在が知られていない頃の話であった。ともあれいまやこの言語学の新星はかのギリシャ詩人の断定を完膚無きまでに論破した功績を担うものである。この著者は今のところ自らの才を「燈火をともして升の下に置く」が如く隠しているのが、やがてその名声が隠れなきものとなることは必定である。」

砂を噛むような居留地の生活の中でこの冊子が一服の清涼剤として歓迎されたことはいまや明白である。また著者もそのつもりで書いた。しかしそのことは語学資料としてのこの冊子の価値を毫も損ねるものではない。フウイヌム国の言葉を扱ったわけではないからである。

参考文献

- M. Paske-Smith, *Western Barbarians in Japan and Formosa in Tokugawa Days, 1603-1868* (Kobe, 1930)
- B・H・チェインバレン著、高梨健吉訳「日本事物誌」(平凡社、昭四四)
- 荒木伊兵衛「日本英語学書誌」(創元社、昭六)
- 重久篤太郎「日本近世英学史」(教育図書、昭一六)
- 堀内克明「横浜と英語—横浜英学史覚書」、『人文科学論集』第十二輯(明治大学経営学部、昭四〇)
- 河竹登志夫「統比較演劇学」(南窓社、昭四九)

- 半沢正時「ヨコハマイングリッシュ・ヨコハマニーズ」、『神奈川文化』二二二号(昭四九)
- 小玉晃一・敏子「明治の横浜」(笠間書院、昭五四)
- 石井研堂「改訂増補明治事物起原」(春陽堂、昭二〇、初版明四〇)
- 篠田敏造「明治百話」(四条書房、昭六)
- 横浜市役所「横浜市史稿―風俗編」(昭七)
- アーネスト・サトー著、坂田精一訳「一外交官の見た明治維新」(岩波書店、昭三五)
- 榎垣実「日本外来語の研究」(研究社、昭三八)
- 日本英学史学会編「英語事始」(日本ブリタニカ社、昭五一)
- 高梨健吉「文明開化の英語」(藤森書店、昭五三)
- 上野景福「英語語彙の研究」(研究社、昭五五)
- H. S. Williams, *Tales of the Foreign Settlements in Japan* (Tuttle, 1958)
- H. S. Williams, *Foreigners in Mikadaland* (Tuttle, 1963)